



駆け足のウズベキスタン

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 福島県立医科大学看護学部 公開日: 2010-05-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 志賀, 令明 メールアドレス: 所属:
URL	https://fmu.repo.nii.ac.jp/records/2000501

海外研修報告

駆け足のウズベキスタン

総合科学部門心理学 志賀 令明

生来の出不精なので海外には極力行かないよう努力した人生を送ってきた。これまでの海外経験は8年前のロスアンゼルスで、パスポートは既に失効していた。

平成20年のお盆過ぎ頃に、なんとなくウズベキスタンという言葉が看護学部内で聞こえるようになった。しかし自分には無関係であるものと考えていた。ところが8月末に学部長との雑談で、勢いで「行っても良いよ」的発言をしてしまい、9月にはパスポートの再取得をするはめになってしまった。つまりウズベキスタンに行くことになってしまったのである。

基本的にウズベキスタンがシルクロードの一部の国であることはなんとなく知っていた。しかしアフガニスタンを始め、～スタンと名のつく国は危険なのではないかという気持ちもあり、やや引き気味ではあった。寒いかもしれないと言われれば洋服屋に行ってジャンパーを購入したり、高い時計は狙われるかもしれないと言われれば、スーパーの時計売り場をさまよったりもした。

今回の訪問の主な目的は、ウズベキスタンにあるフェルガナ医科大学との交流である。併行して、ウズベキスタンに眠る邦人の墓参も目的の一つであった。訪問団の団長は、福島県ウズベキスタン文化交流会会長で、本学の元学長の伊藤 司先生。中山洋子学部長を副団長に、総勢6名の構成である。ちなみに看護学部からは濱尾早苗助教と私が加わった。

9月19日（金）の午後1時半の飛行機に乗り韓国経由でウズベキスタンの首都タシケント国際空港に到着したのは現地時間の午後9時過ぎで、4時間の時差があるので日本時間では午前1時に到着したことになる。荷物の受け渡しに時間がかかり、ホテルに到着したのは午前3時頃だったろうか。部屋のキーカードをもらい、やれやれと思いながら指定された部屋を解錠して入った途端、暗闇の中から女性の声で No!! という叫びが聞こえた。フロントが、既に女性が宿泊している部屋の鍵を渡してよこしたのだ。走って逃げた。向こうもびっくりしたろうが、こちらもびっくりした。だから海外は嫌だと心から毒づいた。

次の日の朝に、タクシー3台に分乗して、タシケントから約400km離れたフェルガナに向かった。鉄道などの公共交通機関が発達していないため、自動車で移動する

のが最も効果的なのだそうである。道路は片道2車線のなかなか広いものであった。しかしそこを走っている自動車はソヴィエト時代の LADA やヒュンダイの1,000cc クラスが多く、しかもかなりの古さなので排気ガスが濃く、空気は決してきれいではなかった。問題は全般的な交通のスピードが異常に速いことで、120km/h で一般国道をみんなで走ると考えればよい。しかもその間をぬって道路を人や牛が横切るのである。それにもかかわらず人身事故を一度も見なかったと言うことは、ウズベキスタンの人々の運転技術と車を避ける歩行者の歩行技術が日本とは比較にならないほど良いと言うことを意味するのだろう。

途中、三蔵法師も通ったという天山山脈を越えて、フェルガナへ。緑が少ない荒れ地と行っても良いのではと思うような畑が続く道であった。

9月21日（日）は朝から、フェルガナ医科大学でのシンポジウムであった。最初に特別講演として、伊藤元学長の「日本の安楽死と尊厳死について」があり、次に中山学部長の基調講演「日本の看護学教育の現状」が行われ、続いて志賀の「現代の日本と人々の心」、濱尾助教の「福島医科大学看護学部のカリキュラム」が報告された。もちろんそれぞれの講演は日本語で行われたが、事前にウズベク語に翻訳された資料が配付され、発表時にもウズベク語への通訳がつくという丁寧なものであった。午後はフェルガナ医科大学側の講演があった。聴衆は教室いっぱいの学生と職員、及び JICA 関係者であったが、印象的なのは学生たちの出で立ちで、やや長すぎると思われる帽子をかぶり、白衣を着ているが聴診器などを持つものはおらず、また廊下に貼ってあった写真では、点滴の管をいじるのに手袋を装着していないことだった。一人一人の学生は人なつこく、努力して看護師になろうとする前向きの姿は見え、また午後の会議では、来年は福島で交流を持つことが決められた。

翌22日（月）は、州の副知事を表敬訪問し、その後また同じ路をたどってタシケントに戻ることになった。その途中にリシタンというところにある日本語学級により、子どもたちが日本語を学んでいる姿に触れることができた。ウズベクでは義務教育は高校生までで、識字率はほぼ100%だという。ただし授業は2部制で、午前の部と午後の部に分かれているそうだ。この日本語学級に

集まってきている子どもたちは口々に日本に対するあこがれを口にし、日本に行ってみたいと話していた。日本は子どもたちにとってのあこがれの国らしい。庶民の一般的な月収が500ドル未満だと聞いていたが、子どもたちは清潔な服をきちんと着ていた。裕福な層の子どもたちに日本語の勉強の機会があるのか分からなかったが、見かけた子どもたちは少なくとも貧困層に属するようには思えなかった。この日の夕食は久しぶりの日本食を食べに行く予定であったが、志賀はウズベク特有の4日目の下痢に襲われ、夕食欠席。異国のトイレットペーパーの堅さに涙した夜であった。

23日(火)はタシケント第一医療専門学校を訪問。女性の校長先生がたくさんしゃべるのでやや感動。お土産にと土でできたウズベク人形をいただいたが大きいのでやや閉口した。その後、初めてウズベクスタンのバザールを見学。様々な商品、金銀細工や果物、加工食品その他が並んでおり、活気がある情景であった。途中、乞食の親子に言い寄られ、多少困ったが現地の通貨で80円分が財布に残っていたので分けてあげると喜んで去っていった。他の人は言い寄られていなかったのも、どうも気弱そうだと思われたらしい。断れませんのオーラを発しているのかと少し悲しかった。下痢が続き絶食。午後、大

使館訪問。57歳にして初めて大使と呼ばれる人に会う。夕方のフェアウェルパーティではついに学部長が下痢の症状を発症した。お元気なのは84歳の伊藤元学長であった。

現地時間の夜1030発の飛行機でウズベクスタンを後にし、偏西風に乗って行きよりも約2時間早く24日の1230に仙台空港に戻った。日本の緑がまぶしかった。

数えて6日間のウズベクスタンの旅であったが、やはり農業などの産業の弱さが目についた。また土地に緑が少なく、水に苦勞している様子がみえた。乳児死亡率が60/1000というのはいかにも高いと思ったが、トイレの未整備さやレストランで必ず出迎えてくれる蝇の多さに首肯することはできた。なにが印象的だったかと言えばやはり子どもたちの目の輝きだと思う。その輝きが曇らぬように国を運営して欲しいと願ったし、彼らの未来に幸せが多く訪れることを願わずにはいられない。個人的に一番好きだったのは、老人といっても60代前半か、の男性がイスラムの帽子をかぶり上着を着て道を歩いていたところかもしれない。凜とした佇まいにふと胸を打たれた。

(2008.11.13)



(天山山脈)



(リシタン日本語学級の子どもたち)